

無量壽

第四号 (平成二四年春号)
発行 雲夢山 壽命寺

永代経

法要

五月十三日

今年も壽命寺の永代経をお勤めする時期になりました。この寺報と合わせてご案内をお届けさせていただきます。詳細はそちらをご確認いただき、是非ともご参拝ください。

永代経と聞くとそういう名のお経があるのかという風に思われる方がたまにおられます。あるいは「永代供養」という言葉と混同してご先祖を供養するための法要と思われている方も見受けられます。

これらはどちらも違っていて、正しくは「お経が永代に渡って伝えられていくように」という願いをもとに勤められる法要ということなのです。

お経とは仏法そのものと言い換えられますし、またそれを学び実践する場がお寺ですから、永代経とはお寺を護り発展させて、後世に引き継いでいくために営まれる法要ということになります。

永代経が先祖供養のためのものではないと聞くと意外に思われる方もあるかもしれません。でもそもそも浄土真宗の念仏は先祖供養のためのものではないのです。ご先祖を蔑ろにしているのではもちろんありません。私のような愚かな凡夫には供養などしたくても到底出来ないという深い内省が、そこにはあるのです。

「古人の跡を求めず、古人の求め

たるところを求めよ」(芭蕉)。私たち浄土真宗の門徒は亡き人の面影や霊魂ではなく、その方が命をかけて私たちに残し伝えてくれたもの、即ち「仏法」を大切に生きる生き方を心がけたいものです。

皆さまの永代経法要へのお参りを、心よりお待ちしております。

【講師のご紹介】



松本紹圭(しゅうけい)師。
本願寺派布
教使/東京港区神谷町光明寺所属。

昭和五十四年年北海道生まれ。

東京大学文学部哲学科卒業。2010年、南インドの Indian School of Business で MBA 取得。

インターネット上の超宗派寺院「彼岸寺」(higan.net)の設立をはじめ、お寺のカフェや音楽会など、さまざまな企画を立ち上げ、運営している。

この春からはこれからの時代を切

り開く住職を養成する講座「未来の住職塾」を東京と京都で開催する。著書に『おぼうさん、はじめました。』(ダイヤモンド社)『こころの静寂を手に入れる三十七の方法』(すばる舎)『お坊さん革命』(講談社)『ラスアルファ新書』『脱「臆病」入門』(すばる舎)など。

右記プロフィールの通り、例年とは若干趣の異なる先生をお招きいたします。

松本師は住職が東京の築地本願寺に勤めていた頃からの友人でもありますが、現在はこれからの仏教・お寺・住職はどうあるべきかという問題について様々な活動を行っており、各方面からも注目を集めている方です。

師の取り組みは「お寺を未来に繋いでいく」という永代経の法要の趣旨にも重なるものである中で、この度ご講師に選ばせていただきました。一般寺院で法話をされるのは貴重な機会だと思いますので是非お聴聞にお参りください。

初参式のご案内



この度、新しい取り組みとして永代経に合わせて初参式（しよさんしき）を執り行ないます。昼の永代経法要に先立って十三時半から実施します。

新しい命を授けられたご家族が阿弥陀如来にその慶びを報告し、生まれてきたお子さんが初めて仏法と出会う場として勤められる大切な儀式、それが初参式です。

一般には赤ちゃんが生まれると「お宮参り」といつて神社にお参りされる方が多いことと思います。それはそれで結構ですが、私たち門徒は阿弥陀如来を心の拠り所としてこの一生を生きさせていたただく者なのですから、やはり人生の節目に当たっては阿弥陀如来の前で手を合わせ、ご報告をさせてい

ただくことも大切にしたいと思えます。ともすればお寺はお葬式やご法事など死に関わる悲しいことがあつた時にお参りするところだという風に思われることが多いのですが、嬉しい時も悲しい時も、いつも一緒に寄り添い、共に笑い共に泣いてくださるのが阿弥陀如来なのだということを忘れないようにしましょう。

そういう訳で壽命寺に縁ある方でここ一年余りの間にご家族にお子さんがお生まれになった方には、是非この度の機会に初参式を授式いただければありがたいことだと存じます。式は二十分ほどのものです。お問い合わせ、お申し込みは住職までお寄せください。どうぞよろしくお願い申し上げます。

壽命寺ホームページ「住職日報」の記事から

<http://jumyouji.net/>

黒猫とのお別れ（2012年4月7日）

今朝は婦人会のお掃除の日でした。そこで黒猫が亡くなっているのが見つかりました。

去年のお正月に私たち住職夫婦はこの壽命寺に入寺させてもらいました。しばらくして、時々境内に3匹の猫がいることに気づきました。母親とその子供たちのようでした。でも子猫の一匹、黒い方は発育に問題があるのか、体が小さくいつも逃げるときに置いて行かれていました。

そのうち、車庫の隅で夜中に一匹でか弱い声で泣いていることがちょくちょくあつて、坊守は育児放棄にでもあつたのかと心配して、ミルクを置いたりしていました。飲んでくれるか心配していましたが、朝になると器が空になっていて、よかったねと夫婦で言い合っていました。

最近はまだ3匹で境内にいる姿をちょくちょく見かけるようになりました。相変わらずやせっぽちでしたが、元気なんだなと思つて、特に気にかけていませんでした。

猫は隠れて死ぬって本当なんですね。本堂と客殿の隙間にひっそりと横たわっていました。亡骸を持ち上げるとぺったんこで軽くって、、、それがとても悲しかったです。

境内の片隅に穴を掘つてお墓を作りました。坊守と二人で讃仏偈のお勤めをしました。

ちっとも仲良くできなかつたけど、ヨタヨタと逃げていく姿をいつまでも覚えているよ。今はさみしい気持ちでいっぱいだけど、お浄土で会えるといいね。きっと会えるね。合掌